武田千代三郎の「競技道」の系譜とその性格

阿部　生雄

The Genealogy of Chiyosaburo Takeda's "Kyogido" and Its Nature

ABE Ikuo

Chiyosaburo Takeda's *"Kyogido"* is one of the earliest concepts of "sportsmanship" in Japan. Chiyosaburo Takeda (1867-1932) was a disciple of F. W. Strange (1853? - 1889) who introduced western sports into Japan in the early stage of the Meiji era. This study focuses on the genealogy and the nature of Takeda's "*kyougido*" that might denote the Japanese reception of sportsmanship.

The sportsmanship in Japan, which commenced with F.W. Strange's practical and 'nonliterate' sportsmanship, was strongly perceived by his disciple, Chiyosaburo Takeda. Under his influence, Takeda amplified the western sportsmanship through his recollection of his mentor, and crystallized his original concept of *Kyogido*. The educational value of game had been cognitive well among the educationists, especially from the social Darwinian and nationalist point of view. *Undokai*, a monthly journal for the athletic exercises, was published in 1897 under these circumstances. Essays and articles in this journal give us good evidence that the concept of *Kyogido* could be fomented by their discourses. Meanwhile, E.H.Mile's 'games education' in his *The Training of the Body* (1901) that gave a model to Takeda's *Riron/Jikken Kyougi Undo* (Theory and Practice, Athletic Exercise. 1903) seems to have affected Takeda's *Kyogido* less than Japanese discourses of sportsmanship in *Undokai* did. *Kyogido* originated from F.W.Strange's 'nonliterate' sportsmanship was nurtured by the discourses of sportsmanship in the monthly journal, *Undokai*.

The features of the *Kyogido* advocated in his *Riron/Jikken Kyogi Undo* were complex and multistoried. Firstly, using a metaphor of Japanese *shugyo* (a sort of training) that had a strong notion of Confucianism, Takeda comprehended *kyogi undo* (athletic exercise) as an instrument for building up human character or 'manlike man'. In this context, Confucianism positively embraced athletics in an instrument of *shuyo* (cultivation of the mind). Secondly, the ideal of 'manlike man' had a strong connotation of *Bushido*. He considered that the traditional character of *Bushi* (samurai) could be maintained through western sports, and was convinced that it could be a 'national character' beyond the feudalistic class orders. Thirdly, *Kyogido* based its theoretical frame on Herbert Spencer's 'education, intellectual, moral, and physical'. Fourthly, *Kyogido* was strongly connected with the idea of social Darwinism. Takeda regards Japanese society since the Meiji Restoration as the locus of the struggle for survival and as the period of the competition of mental power. Fifthly, *Kyogido* associated with nationalism and imperialism. '*Hakoku*' (hegemonic nation) that Takeda frequently used meant the hardy nation that could survive in the relentless international competition under the age of imperialism. The concept of *Kyogido* could never evade the involvement in the imperialistic warfare. Sixthly, *Kyougido* sometimes represents the unquestioning compliance and obedience that connote the credential for the subjects of the Emperor system. The state of the Emperor system skillfully embraced the western athletic sports by means of the conceptual device of *Kyogido*. Seventhly, *Kyogido* emphasizes amateurism. Though Takeda's amateurism was poles apart from Western idea of liberalism, he regarded amateurism as the norms akin to *Bushido* that hated the mercenary deed, praised the honor, and valued the thrift and simplicity. Eighthly, in Takeda's *Kyogido*, there seldom exists a sense of internationalism that transcends imperialism. His *Kyogido* converged

on the concern of ethnocentric chauvinism and imperialistic hegemony. Ninthly, *Kyogido* has little sense of democracy and individualism, but the authoritarian attitude.

Whatever criticism can be made, however, we have to evaluate Takeda's idealistic, or rather optimistic attitude toward western athletic exercise or sport. Otherwise, sport would not have found its *raison d'etre* in the country of parochialism and ethnocentrism. In the dawn of sport in Japan, he received it without any hesitation, settled it in the education of her youths and boys, and believed that they could be 'manlike men' through sport. His conviction in educational function of sport might be equivalent to Pierre de Coubertin's educational ideal expressed in his '*L'Education Athletique*' (1889).

Key words: Chiyosaburo Takeda, Kyogido, Sportsmanship

1. はじめに

様々なスポーツが導入された明治期の日本において、それらの活動がどのように理解され、正当化され、そして人間形成の活動として受容されたのであろうか。本研究は、日本におけるスポーツの導入者として知られるF. W. ストレンジに陸上競技と漕艇の指導を受けた武田千代三郎の「競技道」の概念の形成とその性格に焦点を当てる。というのも、明治初期にストレンジが範を示した「スポーツマンシップ」と武田の唱えた「競技道」との関係を明らかにすることは、国際的なスポーツマンシップ運動の展開というコンテクストにおいて、スポーツ導入期における「スポーツマンシップ」の日本的受容の一典型とその性格を浮き彫りにしてくれると考えられるからである。

2. 回想としてのF. W. ストレンジのスポーツマンシップ

ストレンジ（Frederick William Strange, 1853？-1889）は、恐らくロンドンで生まれ、ユニヴァーシティー・カレッジ・スクール（University College School）に1867年から1868年にかけて在学していた人物であると思われる。ストレンジはこの学校で、まさしくこの時期に江戸幕府によって派遣された英国留学生の一人で後に東京大学理学部長となった菊池大麓に出会ったと考えられる。[1)] 彼は1875年（明治8）3月23日に来日し、4月19日には東京英語学校の教師として働き始めた。以来、1889年（明治22年）7月5日に急死するまで、彼は東京大学予備門、その再編後の高等第一中学校で英語教師を務めた。[2)] 在留外国人向けの雑誌であるJapan Weekly Mail の記事から明らかなように、彼は優れたスポーツマンであった。[3)]

ストレンジは1883年(明治16) 6月16日に東京大学三部と予備門の合同運動会を開催して自ら「アムパイア兼ヂャッジ」となり（この時、菊池大麓は「参謀長の格で全般の指揮監督」に任ぜられたという）、[4)] 1883-4年にかけて漕艇部の前身である走舸組の結成とその競漕会の開催に深く関与し、1885年には帝国大学「運動会」を結成する中心的な人物であったと評される。[5)] その合同運動会の直前に出版され、賞として提供された*Outdoor Games*の序 (Preface)で、ストレンジは、日本の学童がプレーグランドをほとんど利用しないのは、ゲームを知らないからであるとし、ギリシアの人々は知的、身体的修練(mental、and physical exercise)が両立すると信じていた、日本の学生は十分な知的修練を行なっているが、身体的修練は十分ではない、運動による清浄な空気の摂取が清浄な血をつくり、それが神経システムに作用し、その神経を通じて精神が影響を受ける、個人によって差はあるが、一般原則として1ポンドの食物に対して、1時間の運動が必要である、ということを主張した。[6)] ここには武田が後に回顧するような運動やゲームの道徳的効用に関する明示的な主張は見出されないのである。ストレンジは運動、スポーツ、ゲームの手段的価値と教育的効用を雄弁に語り、自らスポーツマンとしてその範を示したことは間違いない。しかしそれは「文字なき」スポーツマンシップであった。

武田千代三郎にとってストレンジはスポーツマンシップの権化というものであった。武田千代三郎 (1867-1932) は 1867 年 (慶応3) 4月24日に柳河藩士、武田道夫の次男として筑後国山門郡北村字柳川村に生まれた。1883年 (明治16) に東京大学予備門に入学しここでストレンジと出会うことになった。武田は1889年に東京帝国大学法科を卒業した後に、内閣法制局を経て長野県、広島県、兵

庫県で参事官や書記官を務めた後に1899年に秋田県の知事となった。その後も1902年に山口県知事、1905年に山梨県知事、1908年に青森県知事の任についた後、帝国海軍協会常務員、神宮皇學館長、大阪市立高等商業学校校長を務めた。また彼は1913年 (大正2) から1921年 (大正10) まで大日本体育協会の副会長となり日本のスポーツ界に大きな影響を与えた人物であった。武田とストレンジの親密な関係は1885年9月に始まる。この時、横浜のアマチュア・ローイング･クラブとの漕艇試合に向けてストレンジから「難行苦行六週日．．．厳師の鋭き激励叱咤の声を頭より浴びて、漕術奥義の直伝を受けた」のであった。[7]
武田がストレンジから受けた感化は1923年 (大正12) の回想『本邦運動会の恩人ストレエンヂ師を想ふ』に詳しい。これは武田とストレンジとの出会いから既に40年を経て書かれたものであった。この中でストレンジは多分に神格化された伝説上の人物となり始めており、ストレンジは恐らくその実像以上に武田のイマーゴと化し、スポーツマンシップの権化と化している。この回想の中で、ストレンジは「水陸諸競技の理法と英国風の純潔なるスポオツマンシップを伝へ、本邦運動の基を開きたる功績」[8] のある人物で、「師の高潔なる人格は益々学生の推重する所となり、スポオツマンシップのアイドルとなって衆人渇仰の焦点となった」[9] のである。実際、明治初期の日本のエリート教育機関でこれほど熱心にスポーツを教えたイギリス人はいないであろう。1883年、予備門に入学した若干17才の武田にとって、その年に東京大学と予備門で初めて開催された運動会を指揮したストレンジは、真正のイギリスのスポーツマンシップを初めて導入した者であり、その唯一の体現者として武田の目に映じたことは間違いなかった。彼が、この回想の中で「師は其の至誠と熱心とを傾けて、我が大学及び高等中学の為に、英国風の運動の技術と精神を移し植ゑられた功績は実に偉大なるもの」[10] であると述べる時、彼は心底からそう信じていたに違いないのである。
武田の回想によれば、運動会が開催される一週間前の土曜（6月9日）にストレンジは、講堂で加藤弘之総理を始め、大学の教授学生・予備門の教諭生徒の前で、「運動は人の獣力のみを練るを目的とせず、吾人の智徳を磨かんが為なり。運動は手段にして目的に非らず、吾人の体躯を練るは病を防ぎ壽を保たんが為のみには非らず、期する所はこれ以上に在り。運動場に於ける訓育の遥かに教室内に於ける教化に勝るものあればなり．．．」[11] と説いたという。ストレンジが本当にこのような内容の演説をしたかどうかを確証すべくもないが、そのことを直ちに膾炙し、吸収する基盤が武田の中には準備されていた。「運動の精神に至っては、英のスポオツマンシップは、我国固有の武士気質と能く合致するものがありましたので、その頃の書生等には、教へて貰う迄もなく、直ちに消化され吸収され」[12] 得たのであった。スポーツマンシップは、明かに「武士気質」という日本的精神の比喩を媒介項として理解されたのであった。

武田がこの回想の中で数え上げた「立派なスポオツマン」たる具体的な条件は次の様なものであった。1)「定日定刻を厳守せよ」、2)「男子事に当たる宜しく奮闘力戦斃れて而して後己むの気概あるべし。敗れて負惜みするは懦夫怯者の亜流のみ」、3)「技を闘は須く公明正大なる可し。姦譎卑劣は丈夫の恥づる所也」、4)「審判と裁定への服従。審判に服従せよ(Don't dispute the umpire)。人は神に非らず、裁定よし當を得ずと信ずべき理由ありとも、敢えて之を議せざるは、乃ち競士の大を為す所以也」、5)「技を楽みて己よりも強き者優れたる者に師事せよ。（Enjoy the games.）之を敵視するは蛮人の勇而已」、6)「賞品は記念物のみ、之を獲るを目的として技を公衆の前に演ず可からず」、7)「倹はスポオツマンの第一の信條たるべし、人の金品の憐みを乞ふて迄も美服し美食し車行せんと欲する勿れ」、8)「技を練る須く学業の余暇を以てすべし．．．曰く克己曰く節制、曰く制慾曰く忍耐、曰く勇敢曰く沈着、敏活にして機知縦横、明快にして気宇壮大、凡そ此の如き気質徳性は、天がスポーツマンに授與する至高至貴の賞品にあらずや。戦ひ敗れてよりコンソレエションの走者たるも、又何ぞ其の数奇を嘆ずる愚を学ばんや。威容を正うし品格を重んじ、誓て市井賣技の徒と同一視せらるる勿れ。Be your own master; be your own champion. Do what is right; do what is just. ' Do' above all, what is noble.」[13] というものであった。更にまた、武田は運動会から「正義の観念」、「一和団結」を学んだのであった。[14] しかし、ストレンジとの出会いから40年を経て回想されたこの「スポーツマ

ンシップ」の骨格は、既に、武田の『理論実験 競技運動』(1904)で説かれる「競技道」に集約されているものであった。[15)]

3.武田千代三郎の「競技運動」と「競技道」

1）「競技運動」

武田千代三郎は明治36年(1903)10月に『理論実験 競技運動 巻之上』を、更に翌年6月にその下巻を合本した『理論実験 競技運動』を出版した。この間に小学生向けに『心身鍛練 少年競技運動』を明治37年4月に刊行したが、武田の「競技道」という概念は合本版の第6編で初めて登場すると考えられる。この明治37年版の自序で、武田は「生理上の学説は、ラグランジ博士、ドクトル、シュミット及びケームブリッジ大学有名の運動家マイルス学士の所説を始め、其の他医書雑誌新聞紙等に散見せる、学者又は運動家の説に基づき、其の繁を去り簡に就きて之を記述せり」とし、更に「ストレーンジ先生の講話及び実地口授」や「余等同人の実験及び余が去る明治32年以来、数年間兵庫県立御影師範学校生徒諸氏に就いて客観的に観察したる所等に拠るもの」を参照にしたことを明らかにしている。[16)]

武田千代三郎の「競技運動」とは「修練的目的」によって行なう「端艇競漕、競歩、競走、高さ及び長さの飛躍、球、砲丸、槌等の投げ方等、速度の遅速、距離の長短遠近を競う運動」[17)]を主に意味している。分けても漕艇と陸上競技を意味する。その「競技運動」の知育、徳育、体育という三育に対する意義を明らかにしようとしたのが『理論実験 競技運動』であったと言えよう。彼の言う広義な「運動」と「競技運動」との関係は図1、図2のようにまとめられる。武田の競技運動とはこのように「運動」＞「自然的・人工的運動」＞「修練的運動」＞「競技運動」という概念的位相を持つもので、今日の「競技」や「スポーツ」という用語よりも狭い概念を持つ言葉であった。 そして「競技運動」が「他の修練的運動に秀づる點は、一所に集りたる競技者中に就いては勿論、世と時と所を異にせる競技者に對しても均しく其の優劣を比較し得べき道あること」[18)]にあった。ここには、明治期のいわゆる「遊戯」として範疇化される様々なゲームや、「競泳」が含まれておらず、「競技運動」とは武田が自ら親しんだ陸上競技と漕艇を主として意味する言葉であった。武田は「運動」を「自然的運動」と「人工的運動」とに分けたが、原始以来の自然的運動を重視した。彼によれば自然的運動とは「獨り原始時代とのみ云ふべからずして、今の世と謂えども国民過半の業務は、原始時代未開の民と甚だしき懸隔を見ないではないか。又単に労役に従事するものばかりでなく、如何なる身分如何なる職業の人と雖も、日常朝夕の起居進退、労佚苦楽の別こそあれ、一として此の自然的運動の惠に依らざることはない。水火震災風波の難に出遭ふた時には自然運動の巧拙は生活問題を通り過ぎて實に吾人の死活問題となって来る。要するに競技運動は人類と共に始まり人類と共に終わるべき吾人自然の運動である」[19)]という生存と生活に関わる運動であった。このように武田は、原始的な「自然的運動」を宿す運動に注目し、それを文明人（近代人）に相応しい「人工的運動」の範疇に温存し、更にそれを「修練的運動」として競技化することによって文明社会に敷延しようとしたのであっ

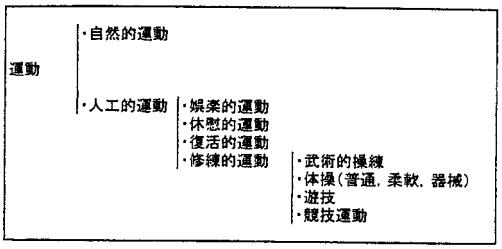

図1. 運動の分類体系における「競技的運動」の位置

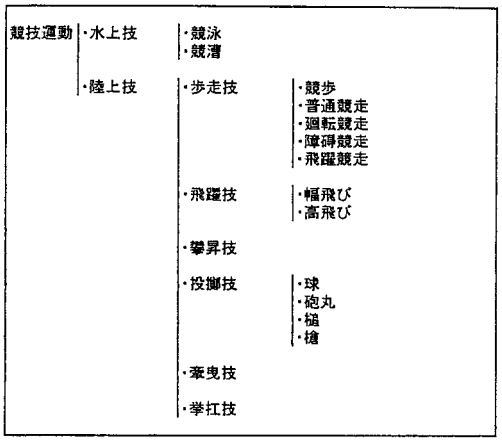

図2. 「競技運動」の種類

た。換言すれば人間の根源的身体能力、原始性を宿す自然的運動を、文明人を鍛える手段として近代的に＜競技化＞しようとしたものなのである。ここでいう近代的な＜競技化＞とは、「大勢の中で誰が一番強いかを直ぐ極めることの出来る運動です。ただ一つ所へ集まった人の内ばかりでなく、外国の人とも、又昔の人とでも優劣を較べ合う事が出来る運動です」[20] と分かりやすく説明された適者生存の翻訳として、また帝国主義的国家競争をメタファとして「競技」を重視するダーウィニアン的志向性を意味する。またその近代的＜競技化＞には身体能力の時空間を越えた比較という標準化の視点が存在していた。武田は、撃剣、柔術、角力、腕押し、棒押しを「大勢の中で誰が一番強いか、直ぐには分らない」ことから、また、「昔の人の優劣や、遠方の人の強弱を較べることも出来ない」[21] ことから競技運動に含めようとしない。武田が競技運動の一つの重要な特色として注目しているのは、地域や時間を超えて優劣、強弱を競争比較できるという点にある。競技運動の近代化とは、帝国主義的国際競争の中で民族間、国家間の身体能力の比較を可能にする一種の競技運動の標準化であり、グローバリゼーションなのであった。

2）「競技道」

武田千代三郎の「競技運動」はその他のあらゆる「運動」と同様、それ自体を超える目的への手段として存在するものでなければならなかった。「運動は決して目的ではなくして、筋肉鍛練と云ふことよりも、尚ほ一層大切なる吾人の智力を練り又徳性を陶冶すると云ふ大目的を達する手段たるに過ぎない」[22] ものであり、「人らしき人を養成する目的を達する手段の一つとして競技運動」[23] は位置づけられねばならなかった。「運動の徳は筋骨を鍛練するに在り。人の神経を訓練するにあり。人の智力を磨き人の情意を練るに在り。人の體力、人の気質、人の品性、此の三つの者は之を机の前に求むることは出来ない。又之を蓐の上に求むることも出来ない。暖衣飽食佚楽嬉戯、斯くして人が其の気質を鍛へ心情を練り得るならば、世に人の教育ほど無雑作のものはないであらう」[24] というものであった。武田はH. スペンサー (Herbert Spencer、1820-1903) の三育論の枠組みに依拠しつつ、運動や競技運動が知育、徳育、体育に果す効能を評価し、「人らしき人を養成する」教育や人間形成の不可欠かつ最も有効な手段であることを主張した。しかし、武田のいう「人らしき人」とはどのようなイメージであったのだろうか。彼は幾分か懐古的に、苦難を越えて良師を求め歩く「維新前後迄の學生」にその「人らしき人」の姿を見出す。[25] これは精神を鍛え、学問・技芸を修め磨くために諸国を巡るという日本の伝統的な「修行」による人間修養の考え方に他ならない。武田は「修行」、「武者修行」という古の人間修養の考えを用いて、ダーウィニアン的生存競争の社会に備えて、競争によって若者を鍛え、人間修養を積ませ、「知徳ある勇者」、「仁人義士」[26] に磨き上げる手段である「競技運動」の意義を説こうとしたのであった。室外教育としての競技運動の目的は、「学生を刺戟激勵して其の惰眠を破り其の安佚を責め、之をして室外に活躍奔馳せしめ、雪を蹴り、雨を衝き、饑渇を忍び、欠乏に耐へ」るようにし、「運動場なる活世界を利用し、学生をして朝夕具さに人生行路の難行苦行を実践せしむること」[27] であった。「修行」という実践的鍛練、ダーウィニアン的ハードシップが「競技運動」の教育的意義、「競技道」の根幹を規定するものであった。武田の比喩によれば「運動は日光である。競技道は天候である。」[28] いかに良い天与の資質、それを育む基盤と教養が備わっていても、人は運動という「日光」、競技道という荒々しい「天候」を待たねば自らの人としての完成を遂げることができないのであった。

武田の「競技道」は (1)「運動の奥義」、(2)「運動の練習」、(3)「運動家の品格」、(4)「運動家の度量禮儀」、(5)「紀律」、(6)「克己節制」、(7)「勇往邁進」という7つの徳目によって構成され、それぞれ表1のような項目で説明された。運動は心身鍛練という目的に奉仕する手段であり、運動自体に目的と価値が内在しているのではない。手段論は武田の「競技道」の最も根底にある原理である。運動は「意力」即ち精神力の鍛練でなければならない。武田が「競技者に必要なる體力は筋力と神経力と、これを叱咤刺戟して其の極度迄働かしめる意力の三つである」[29] と説明するように、「意力」とは筋肉と神経を最大限に発揮させる精神力のことであった。「勝負を争ふは人の天性である」か

表1. 武田千代三郎の「競技道」

徳目	資質と訓戒
1. 運動の奥義	1)運動は心身鍛練の目的を達する手段なり. 故に運動のために運動することは厳に戒めなければならぬ. 2)運動は意力の鍛練なり. 3)運動は円満の情育を遂けしめる実習なり. 4)心身鍛練は一定の時期あり. 5)修練的運動は何れの技を選むにも各人の任意なれども, 修練的運動の利益を享有せんと欲せば, 先づ我が体躯を練りて多少の劇働に堪へ得るに至らしめざるべからず. 6)運動家は競技道の発揮に勉むべし.
2. 運動の練習	1)学生は運動専門家にあらず. 2)運動の為に学業を廃する勿れ. 3)練習時間を作ることに工夫を凝らせ. 4)勉めて歩行せよ, 勉めて徒歩旅行をなせ, 是れ体力養成の第一義なり. 5)運動の種類と季節を撰み, 又其の練習順序を考へよ. 6)運動の技術を磨き, 又其の研究を勉め, 自他の利益を計るべし, 但し之れが為に攻学の時間を減じて迄も, 科学者又は好事家に玩ばるること勿れ.
3. 運動家の品格	1)何れの芸術にも本職との別あり. 2)賞品の為に競争する勿れ. 3)義を尊び名を惜め. 4)利を争う勿れ. 5) 自ら芸人視する勿れ, 己れ先づ侮りて人之を侮る. 6)芸人と技を闘はすこと勿れ. 7)心事陋劣なる輩を排斥し, 決して之と伍する勿れ. 8)競技熱に犯さるること勿れ.
4. 運動家の度量禮儀	1)＜フェアプレイ＞を主とせよ. 2)機敏なれ, 而かも狡獪怯懦なる勿れ. 3)勝に誇り狂喜度を失ふ勿れ. 4)敗れて怨嗟する勿れ. 5)対手を軽蔑する勿れ. 6)天運に甘んせよ. 7)競技は君子の争いなり. 8)対手は汝の良師益友なり. 9)礼節を尊ひ遜譲を主とすへし.
5. 紀律	1)時間を確守せよ. 2)約を重んじ上長を煩はす勿れ. 3)諸事紀律を守れ. 4)審判に服従せよ.
6. 克己節制	1)質素簡易を主とし奢侈佚楽を遠けよ. 2)人に克たんと欲せは先づ己に克て. 3)苦を避くるは楽を求むるの道にあらす, 真の楽は苦に勝つにあり.
7. 勇往邁進	1)極力闘って憾を遺す勿れ. 英語で云ふと Make your best. 此の一句こそ実に競技者の死しても忘るべからざるところである.

『理論実験 競技運動』(1904) pp.609-627より作表

ら、競技的運動は喜怒哀楽愛憎欲という「七情」を緩和し理性によってそれらの情を抑制する試練であり最も有力な手段となる。学生時代は「実力（智徳體）養成期」であり、この時期に机の前にばかりいることは「結局人の為にも国の為にもならい」ことになる。学生は「最後の勝利者」を目指して「実力養成」に努め、「覇国の青年たるもの、老いて益々壮なるの活力を養はんと欲せば、青年時代に十分な鍛錬を積んで置かなければ」ならないのであった。[30] 運動場における学生の心懸け、競技道の遵守が「全国運動の盛衰」に影響を与えることから、運動が「一身の道楽に過ぎずなどとの謬見を懐抱」してはならない。運動場は真面目な修養の場であり、けっして道楽の場ではないのである。

第二の「運動の練習」で、武田は学生の本分を明確に勉強に置く。「今の世は智力競争」[31] の時であり、佚楽に身を蕩じたり、好事家に煽られて技を衒い見せびらかすことは愚の極みと見なしていた。高等な技に熟達しようとして学業の時間を犠牲にすることは戒められる。「如何に趣味あり利益ある運動でも、之に熟するに極めて多くの時間を要するものは、學に忠ならんと欲するものの運動には不適当である。この点から云ふと＜ベースボール＞などは考へものである」[32] というものであった。ゲーム (遊技) に対する武田の比較的低い評価は彼のソーシャル・ダーウィニアン的性格を示しているとも言えよう。この部分で主張される要点は、学生の本分は勉強であり、学生運動家はアマチュアたれ、ということであった。こうした認識は必然的に「運動家の品格」に投影するものであった。

第三の「運動家の品格」とはプロフェショナルの卓越した「技能」によっても得られぬ資質である。物欲、売名、余興で公衆に向かって技を見世物にすることが厳しく咎められ、いわば、教養としての、アマチュアとしての競技が求められる。競技場は品格を示す「紳士の演技」の場であった。「抑も競技場の貴い所は如何なる處に在るか。權勢も如何とも能はざる、会長以下役員の献身的の力役(マニュアルウァーク)あるが為である。萬金も買ふ能はざる紳士の演技ある為である。唯だ此の二つのものがあって而して始めて競技会がある」[33] のであった。武田のエリート教育論としての「競技道」は、国を担うエリートとして義と名誉を重んじ、利、売名を目的とする見世物、余興を忌避した。競技はあくまで「紳士の演技」でなければならなかった。

第四の「運動家の度量禮儀」では競技における「フェアプレイ」と「禮儀」正しさが説かれる。彼は「恭謙、博愛、忍辱、寛容等の諸徳は競技が吾人に與ふる訓育の最も美なるものである」[34] と捉えていた。しかし、今の運動会はそうした諸徳を身につける場になっていないと批判する。その理由は「今の一般競技場には＜フェアプレイ＞が全く欠けて居て何人も競技の公正を保護するものなく、思慮乏しく、分別足らざる血気の青年をして、其七情を制御することを教ふるものなきか為である」と考えていた。つまり上長の者が「競技に對する道念に乏しく、其の真義を知らざるに帰因して居る」[35] のであり、若者を厳しく咎めることをしないことに原因があると考えていた。競技における「競争は喧嘩ではない。戦争でもない。競技は利得を争うものではない、権勢を争うものでもない。彼此の所謂不可勝を比較して其の優劣を競ひ、互に對手を他山の石となして我が実力を研鑽し、以て相楽むを本旨とする」という孫子の「不可勝」の考えに基づかねばならないとした。「喧嘩や戦争は其の目的勝を制するにあるから、其の手段は成るべく奇、正、実、譎詐、狡獪を尊び、巧に敵の寝首を掻くを戦上手として居る」が、競技における競争では「全く之れに反して、一から十迄＜フェアプレイ＞に依らなければ」ならないのであり、「俗世界の人間に、美其のものの如く純潔に、美其のものの如く公正なる競争の快楽を感ぜし」めることが目的であり、「競技場に上がる者は、己れの人たるを忘れて、神の弟子とでもなった心持で居なくては」ならないのであった。[36] 競技者は真の武士のように「禮儀を重んじ、仁義を尊び、名ある勇士を尋ね歩きて之と闘ふを以て限りなき幸福、此の上なき栄誉」[37] とする態度を身につけなければならない。武田の「フェアプレー」の理解は、日本の武士道や兵法、孫子の「不可勝」や、仁義礼智信という儒教思想と深部で共鳴していた。武田のエリートに向けた「競技道」は、儒学で言う「修己治人」(わが身の徳を磨き人を治める)を色濃く反映したものであったと言えよう。

第5の「紀律」では秩序と服従が説かれる。競技の進行を妨げないよう、競技会の体面のため、

また自己の「修業」の一つとして、時間を厳守しなければならない。また競技者は「修業」として「服従の美徳を実践する」ことに勉めなければならない。競技者は「堪忍の出来る堪忍だれもする、出来ぬ堪忍するが堪忍」[38]（ならぬ堪忍するが堪忍）を座右の銘とすべきである。「多くの競技者は服従の美徳たるを知るも、真に服従の意義を知つて居るものは少ない。多くは理の服すべきなくば、之と争ふも可なりと誤解して居る。然れとも紀律を正すが為に服従と云ふときは、理性正邪を論せず命令権ある者に絶対的に服従することを云ふのである。服すべきに服するは何の修業にもならぬ。服し難いけれども、紀律の為とあらば致方なしとて快く服従するからこそ、寛恕忍辱などの美徳を実践することが出来る」[39] のであった。武田のいう「紀律」とは、秩序保持のための上長に対する絶対的服従を意味していた。そしてそれは天皇制イデオロギーと共鳴するものでもあった。

第六の「克己節制」で、武田は「チャムピオン」という学生の「お抱選手」を批判する。各学年の学生は醵金して「養生費」を作り自分たちの代表を抱え込んでいる。これは昔の大名のお抱角力と変わらないというのである。こうした「チャムピオン」はそうした待遇に甘んじて贅沢に耽っているが、「競技の練習には、所謂養生費などと称して多額の金が要る筈はない」[40] のである。「練習費として多くの金を費やす者は、夫れ丈け克己の美徳を欠いて居るもの」であり、「練習中の飲食起居に関する節制も、亦た意力訓練の一法」なのであった。[41] 克己、節制、質素は学生運動家の不可欠な資質であった。

第七の「勇往邁進」は「＜極力闘って憾を遺す勿れ＞ 英語で云ふとMake your best。此の一句こそ実に競技者の死しても忘るべからざる所である。競技の徳は実に此の一言で蔽はれて居る」[42] というものであった。異なるものが「大小軽重優劣遅速を比較すれば、同一であるか、差があるか」のどちらかである。「競技の本旨は即ち二者の極力を比較して、公明正大に其の優劣を比較するに在るのであって、勝を争ふの謂ではない。極力闘っても己より強い者に勝てないのは当然である。毫しも恥づるには及ばない。自ら憾むるも及ばない。又他人を怨み、又は之を罵るにも及ばない。競士の恥づべきは極力闘はざるに在り。對手の優勢を見て直ちに之に降服する在り」[43] というように、最後まで正々堂々、自分の全力を出し切り、悔いを遺さぬこと、即ち、菊池大麓が「プラック」(pluck)と言ったところの資質であった。

このように「競技道」とは「人らしき人を養成する目的を達する手段の一つとして競技運動の真価を明らかに」[44] し、その真価を実践の中で体得し、人らしき人となる道のことなのであった。そこには封建制の瓦解によっても喪失し得なかった「武士道」の近代化と市民化、そしてその鍛練形式としての「修行」や封建時代の道徳としての儒教思想の基底性が、西洋的「競技運動」の精神としての「競技道」に投影していたのであった。また武田の「競技道」には、帝国主義的国際競争という世界環境の中に歩み出し、世界と社会を自由競争、適者生存、生存競争というダーウィニアン的アナロジーで捉え、スペンサーの三育論によって健全で従順な「覇國の民」を形成しようとする近代日本の国民国家形成の意志が反映していた。武田にとってストレンジの導入した西洋的「競技運動」と「スポーツマンシップ」は、近代日本にとって決して対立的な、異質的なものではなかった。それらは日本的土壌と精神に移植可能なものであり、日本が世界の「覇國」となることを可能にする手段であり、精神であった。武田の「競技道」が、日清戦争 (1894) に勝利し、正に日露戦争 (1904-1905) に突入し、第一次日韓協約 (1904) を締結して、天皇制イデオロギーの下で日本帝国の「覇國」化を展望していた時期に成立したことを想起することは重要である。西洋的「競技運動」とハイブリッドな「競技道」は日本帝国建設のためのプロパガンダとなり始めるのである。『心身鍛練 少年競技運動』(1904)では、『理論実験 競技運動』よりももっと直接的に好戦的な「覇國之少年」像が提起される。この本は「我が帝国の末頼もしき少年生徒に體が丈夫で、力があって、悧巧で敏捷で、そして勇気があり、しかも柔和で品の良い人になるには学校で勉強する外に常々ドー云ふ様に心懸けなければならぬか」[45] ということを書いたものであり、「教場に入りても、運動場に出ても、一心に学問運動に精を出して、筋骨も徳操も智力も三つとも揃った立派な人」[46]、即ち「覇國之少年」となることを訴えた書であった。「時々君らを覇國之少年と呼び

かけるは、我が大日本帝国はモーソロ々々世界の強い國々の内でも、上の方に立つ様になってきたから、此の上益々君等に奮発をして貰って、著者等が生きて居る内に、我が國を世界の覇國にして貰いたいと思ふて居るからです。覇國之少年！何と好い時に君等は生れ合したではないか！」[47]

4. ストレンジの「スポーツマンシップ」と武田千代三郎の「競技道」の媒介項

F. W. ストレンジの「スポーツマンシップ」に関する影響と言説は、そのほとんどが武田千代三郎の回想を通じて伝承される。ストレンジの文字なき「スポーツマンシップ」の言説と影響は、恐らく幾分かの増幅を武田の回想という回路によって遂げ、武田の「競技道」に結晶し、究極的に日本的な「スポーツマンシップ」の骨格を形成して行くのである。ストレンジの文字なき「スポーツマンシップ」と約20年の時差をもって形成された武田千代三郎の「競技道」との間には、その全てをストレンジの影響に還元し得ない他の影響が介在していたと考えられる。それ故、次に武田の「競技道」概念の成立を導いた主要な媒介項を検討することにしよう。ストレンジの*Outdoor Games*（1883）はその後に続々と出版される遊戯書の端緒を切開いた。明治10年代末から明治20年代初期には、その第一次ブームともいえるように、遊佐盈作の『新撰小学体育全書』（1884）や、ストレンジの本の翻訳版である下村泰大の『西洋戸外遊戯法』（1885）、坪井玄道の『戸外遊戯法』（1885）を契機として、各地で類似した数多くの遊戯書が出版された。そこには「遊戯」（game）の教育的価値を断片的に指摘する言説や、日本の「スポーツマンシップ」の最も原生的な論調を見出すことができる。[48] しかし、主に小学校の生徒を対象にした遊戯書の言説は、日本的スポーツマンシップの萌芽という先駆性を持ちつつも、次第に中・高等教育機関で発達を遂げたスポーツやゲーム等の競技活動に伴う精神そのものを表現するものではなかった。それらは競技者自身の自覚的な競技に対する正当化、擁護、礼賛の根拠と論理を必ずしも示してはいないからである。そこで、ここでは中・高等教育機関におけるスポーツやゲーム等の競技活動の情報交換の場となった月刊誌『運動界』に注目し、主に、武田の「競技道」に影響を与えた幾つかの論説に言及する。この雑誌は「帝国大学及び第壹高等学校の運動家諸氏吾等か計画」したものであり、「吾『運動界』は決して智徳の二育を軽ずる者に非ざれども、最も重きを躰育の事に置き、力の及ぶ限りこれを奨励して、勇壮活発なる運動遊戯を青年子弟の間に流行せしめ、以て當今の大患なる優柔懦弱の風を移し、かくてわが国将来の継続者をして、剛健なる国民たらしめんことを期する者なり」[49] という意図から、明治30年7月から明治33年4月にかけて発行されたものであった。

1）菊池大麓の「運動の精神」

ここでは武田千代三郎の「競技道」概念に影響を与えたと考えられる菊池大麓の「運動の精神」を最初の媒介項として取り上げよう。既に見てきたように、ストレンジと菊池大麓はロンドンで出会っていた可能性が高い。その出会いは菊池の第一回の英国留学でなされた。しかし菊池は1870年から1878年に及んだ第二回目の英国留学で、再度、ユニヴァーシティ・カレッジ・スクールで教育を受けた後にケンブリッジ大学のセント・ジョーンズ学寮（St. John's）に進学して数学を修めることになる。この間、前者の学校ではファイヴズのクラブに入会したり、弁論部で活躍するなど課外活動に積極的に参加しており、[50] ケンブリッジ大学では様々なスポーツ活動の見聞を広めていた。この当時のセント・ジョーンズ学寮は、多くのボート・ブルーを輩出していた有数の学寮であった。菊池の大学スポーツに関する印象は、彼が東京帝国大学総長かつ「帝国大学運動会」の会長であった明治31年11月になされた演説に詳しい。この演説は、既に述べたように、第一高等学校(第一高等中学校)や東京帝国大学(東京大学)の「運動遊戯」愛好家が中核となって全国の高等学校、中学校、師範学校等の「運動家」との交流を目的として出版された月刊誌『運動界』の中で、「運動の精神」と題されて紹介された。

菊池は、小さな島国を世界の大帝国にしたイギリス人の「気象」の由来を問い、それが中学校や大学での「運動」に存することを指摘した上で、運動が培う5つの気象に言及した。[51] 第1は「マンリネス」で「即ち男らしきことである運動を為し競争場裏に立つには男らしくなけれはらぬ懦弱でけちけちして居る者はとてもいけない」と説明される資質であった。[52] 第2は「プラック」で「これを譯したら不撓の精神とでも言ふ可

きか、どんなことに出遇っても屈せず撓まぬと云ふ精神である、勝ったとき勢い善く威張ると云ふことは誰でも出来る然し競争だから負けることも必ず有る。其負けたときに醜躰を露さず躰裁善く負けると云ふことは随分むづかしいことである、英人は負けても自分は負けたと云ふことを知らぬ、それか英人の勝つ所以であると云って居る、之で無ければいかぬ、勝つ時には威張り負けたときには弱ってしまう様な精神は、国民として甚だ困ることである」というものであった。ここでは漕艇で勝負がついて漕ぐことをやめてしまうようなことを最もストレンジが嫌ったという逸話を挿み、最後まで敢闘する精神を強調している。[53] 第3は「フェヤープレーである、公平である、卑劣手段をとらぬことである」というフェアプレーの精神である。「小股を抄っても勝ちさいすれば宜いと云ふ様な精神は止さなければいかぬ、国民に此気象が無ければ迚も大国民には成れない」とし、運動会がこの精神を「習性」とする良い機会であるとした。[54] 第4は「マグナニミテー」と「ゼネロシテー」で「心を大きくすることである、敵方に対して其心を大きくするが肝要なること」であった。負けて罵詈讒謗したり、腹いせに相手に害を加えることのない、また昔の武術に見られるような礼に始まり礼に終わるところの、勝敗を超越した度量の大きさ、マグナニミティーの精神であった。[55] 第5は「オーダー」、秩序を守ることであった。運動会において、「自ら委員を選んで置きながら又自ら判定者を置きながら、判定者の言ふことを聞かないで判定者に議論を仕掛け、委員の命令を聞かない時間も正しくしなければ規則もかまわないと云ふ様なことでは到底運動會は成立って行くものでない、秩序の無い運動會は不面目に陥るは知れたことである」というもので、規則、判定への服従と紀律の保持という点にあった。[56] 菊池はこうしたイギリス人の誇る5つの「気象」は彼らの運動会や競争会に負うところが大きいとした上で、日本の「武士気質」に言及した。彼によれば「此等の気象は即吾邦に於ても古より武士気質として尊んだものと一致して居る、昔より真の武士理想の武士には悉く是等の気象が備わってあった」[57] のであり、彼はイギリス人の「気象」と「運動の精神」が日本人の「武士気質」に等置し得るものとして捉えていたのであった。こうした菊池大麓の英国の留学から学んだ純正の「運動の精神」とその「武士道気質」による比喩的把握は、武田千代三郎の「競技道」概念の中核に位置することになる。ストレンジの文字なき言説は、菊池大麓の「運動の精神」を介して、理論的生命力を持つものとして武田の精神に刻まれたのであった。

2）木下廣次京都大学総長の運動意見

菊池大麓のイギリスの運動精神と武士気質との等置は、当時の大学においていわば開明的立場にあった。京都大学総長の木下廣次は、菊池と異なる立場から運動を論じた。木下は京都大学で最初の「陸上競技運動会」を開催したとき「運動会なるものは元より大学事業として左まで重大なる地位を占むるものに非ざるべしと雖も事苟くも一学校の行動として世上に発表せらるる以上は其依る所の主旨方針に因りて行動を一にすべきは元より当然の事なり特に我等は倶に京都帝国大学の創立者たるを以て瑣細の事と雖とも其始めを慎まざるべからず是れ畢竟其終を全うせんことを期するの精神に出づるのみ」とし、大学における運動会の占める位置を菊池よりも低く見積もり「瑣細の事」と見ていた。[58] 彼は「競技運動」が「青年者」に欠くことのできぬものであり、「年長者」にとっても「一必要物」と見ていたが、「競技は従来我邦に存在」しなかったものであり、「運動会なるものは元と輸入制の一」であることから、「海国民として又全国皆兵主義を執れる国民として如何なる種類の競技を採りて以て我が特有のものと為すべき」かを考えなければならない、という立場を採った。学生の運動として如何なる競技を選択するのか、これが木下の最大の関心事であった。彼は第一高等中学校に在学していたときに、「撃劍、柔道、端艇、野球、テニス、遠足等より運動」を経験し「我大和民族に適応するの競技を選択発見」しようとしたが、このうち「学生挙りて之に與ることを得、野外の露営夜間の勤務等頗る身体及心膽を練磨するの点に於て大に効力あることを認めた」のは「對抗運動」のみ、即ち陸上競技のみであった。野球や端艇も「對抗運動」に次いで効果があったが、「学校の特技」として採用する迄には至らないと言うのであった。[59] 木下は東京帝国大学や中学校以上の運動会に、今や運動競技の種目を増やそうとする傾向と「餘興的滑稽的祭禮的の遊戯を加へ新を競ひ奇を衒ひ揚々として観客に誇る」姿を見出していた。

木下にとってこうした運動会の姿はその「本旨を忘失せるに出でしもの」に他ならなかった。[60] 「学校の運動場は古昔に於ける武藝の道場なり競技は他流試合なり他流試合にして其目的単に人目を喜ばしむるに在らは其武技たるの価値は全く滅却せられたるなり」[61] というものであった。それ故、運動会が人の目を楽しませる見世物になってはならないのであった。オックスフォードとケンブリッジとの「競技は全く競漕の一技に止まり固と両大学間の他流試合」として真剣に取り組まれており、観客の目を楽しませることを目的としているのではない。またイギリスの学校で行われている「勇壮活溌」で「同心協力を以て敵手に當る組織」としての「フートボール」は「英国人の對世界的思想を涵養せるものにして學校に於ける徳育の源は聖書に非ずして寧ろ＜フートボール＞に在りと断言」[62] されているものであり、決して見世物としてではない。それ故、種目を限定して「我国民の性格に適應せる特技」を持たなければならない。日本の軍隊は「欧米諸国の軍隊に比すれば最も多く駈足する軍隊」であると言われており、「駈足は一長技として大和民族の専有に期すべきもの」であることから、運動会は祭りとしてではなく、「駈足を以って心身を練磨」すべき機会なのであった。「學校の競技亦多数を要せず競争の一技を以て世界萬國に當るに足る之を以て支那四百餘州を駈足するも善し以て西邊利亜の廣原を突貫するも可なり駈足の進歩を企圖せる大日本國の青年が駈足を以って心身を錬磨するも亦妙ならずや是れ其競走を採用せる所以なり」とした。[63] こうした駈足を中心とする大学の運動会は中学校、師範学校、青年団等の運動会の模範とならなければならず、そのことによって「国民特得の運動會」が形成されるのであった。大学の運動会には中学や師範学校の選手を招待し、中学校の優勝選手には「義勇旗」を与え、師範学校の優勝者には「啓發旗」を贈り、それを「関西年中行事」にすることである。「商品なるものは由来競技の目的にあらず」であるから、賞品は質素な「鋼鐵製の賞牌」にする。木下は、名誉ある個人や団体からの運動会の主旨に賛同する寄附を除いて、運動会の名で「金銭若しくは物品の寄附を世人に請求する」ことを固く禁じた。そして彼は最後に「競技場内は一定の秩序を保つべきこと是れ競技道場の作法なり」として「道場」というアナロジーによって運動会の「静粛」と秩序維持を求めたのであった。

木下廣次の「運動會」や「競技運動」の評価は菊池大麓のそれと比べるときより直接的に帝国観念と結びついている。「競技」が「輸入制の一」であることから、「我国民の性格に適應せる特技」となるものを「大和民族」の視点から選択しなければならない。また、軍事的効用の度合いから競技種目を制限し、国民皆兵を意識して大学運動会を広く開放し、軍隊的褒賞制度を導入し、お祭りではなく鍛練的で静粛、質素で紀律ある運営を主張する。同時にまた、学生という将来の国家的指導者、エリートの鍛練と修養を全面に押し出す。学生運動家は「遊戯的滑稽的祭禮的の遊戯」で観客を喜ばすことを忌避し、金銭には潔白であり、秩序と名誉を重んじ、競技を「武藝の道場」として捉えて自己の鍛練修養の場とすることに勤しむことが強調された。ここには民族主義、軍国主義、エリート意識としてのアマチュアリズムに裏打ちされた国民形成理念としてのスポーツマンシップがはっきりと姿を現しているのである。ストレンジの「スポーツマンシップ」と異なるもう一つの系譜がここに息吹いている。

3）E. マイルズのゲーム教育論

武田千代三郎の「競技道」の概念は『理論実験 競技運動』の合本版 (1904) の第6編で初めて登場すると考えられるが、[64] この本はイギリスのケンブリッジで学んだアメリカの言語学者で優秀なテニスやラケッツのプレーヤーであったマイルズ (Eustace H. Miles) と、ドイツの遊戯促進運動の理論的指導者で国民・青年遊戯中央委員会（Der Zentralausschuss zur Foerderung der Volks-und Jugendspiel in Deutchland、1891年設立) の組織化に加わった運動生理学者のシュミット (Ferdinand August Schmidt) の共著になる *The Training of the Body for Games, Athletics, Gymnastics, and Other Forms of Exercise and for Health, Growth, and Development* (1901) の影響を強く受けた本でもあった。[65] 武田の「競技道」概念の成立に、この本がどの程度の影響を与えているのか、もう一つの媒介項として確認しておく必要がある。この本の特徴は、両者共トレーニングについて論じているが、マイルズのゲーム擁護論がシュミットの生理・解剖学的な戸外運動擁護論を補強する形で編集されている点にある。武田の『理論実験 競

技運動』の内容の大部は、シュミットの解剖学的、生理学的、衛生学的、運動学的な知見に依拠していたことが理解できる。しかし武田の「競技道」の源泉をシュミットの生理解剖学的知見に還元することはできない。武田の「競技道」と関連する部分は、むしろマイルズのゲーム擁護論の部分であったと考えられる。

マイルズは「我々のなすことの大部分を、我々は身体 (body) を通じてなす。身体を通じて我々は感じ、考え、話し、そして行為する。この故に健康と健康の手段を研究することは重要である」[66] とする。彼は思惟を含めてあらゆる日常的実践は身体に根差すという「経験」と「実践」を重視する考え方の持ち主であった。この考え方の上に身体の健康と「トレーニング」は把握される。

またマイルズは、19世紀に発達を遂げたゲームやスポーツを来る20世紀の明るい予兆として捉えていたが、それが広く「国民教育」の重要な分野として認識されていないと考えていた。「依然としてゲームやアスレティックスのためだけでなく仕事 (work) のためのトレーニングの基本原理は日々、何百万の人々によって無視されている。健康、トレーニング、そしてアスレティックスに関する国民教育 (National Education) は、確かにあるとは言えても、非常に偶然的なものである。多くの知識があり、多くの文献があるにもかかわらず、これらのものは国民 (a Nation) としての我々に影響を与えていない」[67] のであった。健康の「手段」としての「トレーニング」を「国民教育」に位置づけようとする彼の発想は、恐らく武田千代三郎の「競技道」を下支えする考えであったとしても、さして目新しいものではなかったであろう。

マイルズの「ゲーム」重視の論調は、必ずしも武田の「競技道」に直接的な影響を及ぼしていないように思われる。マイルズは、技能 (skill) が30歳以後に伸びないとか、肉食が健康とトレーニングに必要であるとか、命令による行進のような体操運動 (gymnastic exercises) を重視しようとするシュミットと意見を異にしていたのであり、マイルズはあくまでゲームの価値に固執していた。「私は運動の最良の方法を示すと同時に、幾つかの広まっている誤り、＜ゲームは単にゲームでしかない＞という間違いを明らかにしたい。大部分のドイツ人 (シュミット博士は幸いなことに例外であるが) は、ゲームはゲームですらなく、単に筋肉の発達であるという印象を持っている。多くのイギリス人はゲームはそれよりも幾分ましなものであると思っている。しかし多くの点でゲームは我々が提供し得る最良の全面教育でありトレーニングとなるということに気付いているものは殆どいない」[68] と考えていた。そしてまた「この種の運動の価値 (value) は、都会生活 (city life) が田園生活 (country life) をますます犠牲にしていることから重要性を増しているからである。そこで私はいかに人はゲームに上達するのかに多くを費やした。そしてゲームは身体 (body) のトレーニングと教育にとって、道徳性 (moral character) にとって、また知性にとってすら本質的であることを指摘した。我々はもう気付くべきときであり、総ての国民はいかにこの目的のためのゲームが単なる運動よりも優れているかに気付くべきとき」[69] なのであると主張した。ゲームよりも陸上競技と漕艇を主内容とした武田の『理論実験 競技運動』と、この点では断絶を示す。しかし、マイルズの「ゲーム」が身体的健康、道徳性、知性にとって本質的な効用を持つという三育論的把握は、武田の「競技運動」の身体的、道徳的、知的効用の認識と同じであり、両者に共有されている。

マイルズの「ゲーム」には国民国家統合の教育原理のみならず、民族主義的かつ国際主義的な視点が内包されている。彼にとって、フットボールやホッケー、漕艇等のゲームやスポーツはあくまで「アングロ・サクソン的運動」(Anglo-Saxon exercises) と表現されるものであったし、「ゲームやアスレティックスやスポーツは戦争のための素晴らしい準備」なのである。しかし、その一方で、「多くの国民が多くのゲームで競うとき、またゲームがより民主的となると、国家間の交流はより良いものに変化する」のであり、「言葉の違い、商業的思惑の違い、習慣の違い、衣裳や見かけの違い」を越えて「相互理解とそれ故に相互尊敬による結合をもたらす」偉大な力となるという考えも存在していた。[70] ゲームは今やドイツ人や様々な国民によって行われ、「スポーツマン的プレー」(sportsmanlike play) は感銘を与え、諸国民の間の交流や相互信頼を促進していると主張する。「諸国民は、今や、英語圏の人々のこの偉大な成功の秘訣を学びつつあり、間もなく単なる体

操や他の運動と対立するようなゲームを自らの教育の一部として採用するであろう。ドイツ皇帝は非常に心の広いお方なので、彼の国民のためになるこのような貴重な手段を無視することはない。ここでは勝利と勝利への欲求が悪い感情（ill-feeling) やジェラシーをもたらすことはない。各国民は総てのゲームに対して、またそれらのプレーの仕方に対して自らの貢献を果せるであろう」[71] と考えていた。これはアングロ・サクソンのゲーム促進運動であり、そのグローバリゼーションの主張であった。確かにマイルズの主張には「ゲーム」を通じた帝国主義的拡張が内包されているとも言えるが、異なる民族原理に基づいた帝国主義的競争というよりもむしろ国際的な交流と融和を促進するものとしてゲームを位置づけようとする傾向が明示的である。こうした国際主義的な視点は、一般的に日本の「スポーツマンシップ」論に欠落している点である。

また、マイルズの「ゲーム」は経験主義的、個人主義的側面を内包している。「実際、別々の人々の個人的経験はいつの日か全世界に影響を与える偉大な教授であり、またそうなるかもしれないのである。現在、個人的経験は健康の科学の最も堅固な基礎なのである。」[72] マイルズの立場には個人の多様性と個人的経験の重視、その経験から一般的法則を見出そうとする帰納法的姿勢、敢えて言えば民主的姿勢が見出される。

マイルズは「ゲーム」を、「楽しさ」と「愉快さ」を核にした社会的資質の教育手段として捉える。アングロ･サクソン人が「単なる運動よりもゲームを好む」理由は「ゲームの楽しさと愉快さ」にある。「教育に関して、もう一つ間違いが明らかにされねばならない。＜楽しく興味ある＞‘教育’は良い‘教育’では有り得ないという誤解である。＜規律と骨折り仕事＞こそが依然として‘教育者’ぶった人たちの合い言葉なのである。しかし‘教育者’がそこまでいかなくとも、依然として、彼らははっきりと、多くのゲームは我々が学校で教えたいと願っている最大の教訓の幾つかを教授できる、ということに気が付いていない。しかし、実際にこのことが部分的に理解されてきたが故に、ゲームは諸資質を発達させることができるだけでなく、ゲームは協力、自立、法や名誉への服従のような偉大な諸原理の＜実物教授＞ (Object-Lessons) となり得るのである。これほど興味が湧き、楽しく、理解が容易な＜実物教授＞はないであろう。この故に少年にとってはアソシエーション・フットボールから得る協力についての実物教授は素晴らしいのである。誰がこの原理を教授するようなもっと優れた手段を示せるであろうか。」[73] こうしたゲームやスポーツの快楽に対する楽観主義は、やはり日本のスポーツマンシップに希薄な姿勢である。しかしその快楽主義は決して無原則ではない。快楽は無制限に放任されるのではなく義務に接続される。「＜肉体のトレーニングに煩わされるのは価値がないことである＞というのは粗雑で感覚的な誤ちと言えよう。＜楽しめ、そして考えるな＞は命題の形をとったこの誤りの表現である。我々が肉体や総てのその部分を含めて、自らに向けた義務を果すことなく＜神への礼拝＞、＜隣人への義務＞を果していると装うことなのである。我々がこうした考えをとればとるほど、ますます誤ることになる。」[74]

マイルズの「ゲーム」教育の目的は次のような一節に集約されている。「私の目的は人々、特に若者が殆ど自分で出来るように援助することである。私は一見小さなことのようだが、実際は重大なことに当局のすべての人々の注意を喚起したい。私は読者がゲームや運動で成功するよう援助するだけでなく、それらの健康上の重要性を示し、それらがどのように心臓や肺や消化や脳等に影響があるかを示したい。そしてまた＜ゲームはどうしたら教育になり得るのか＞ということを、単に解剖学や生理学 ―それ自体極めて重要な学問であり、興味を持つゲームや運動について学んでいれば最もよく身につく学問である― によってだけでなく、正しい法律に対する従順、実践 (practice) と習慣、協力等のような人生の偉大な教訓といったことによって示したい。」[75]

マイルズは「アングロ・サクソン的」運動としての「ゲーム」の多様な手段的価値を無体系に列挙した。その無体系を身体的資質、精神的・道徳的資質(個人的、社会的資質)という視点から整理してみよう。身体的資質としては健康、活動力、身体美といったものが挙げられている。個人的な精神的・道徳的資質としては、自己を善や高尚な目的に向けて高めようとする向上心、卓越、自立、自由な選択と自己活動、情緒や感情を抑制する自己統制、根気、根性、忍耐心、状況への機敏

な適応、自信、規則正しさ、オリジナリティー、観察力、正確さ、時と金の節約、専門性といった資質が挙げられている。社会的な精神的・道徳的資質としては、協力、法と名誉への服従とフェアプレー、友情、ヒューマニティー、他者を助ける習慣、社交、相互依存、分業、競い合い、団体感情、愛国心、国際融和、民主主義といった資質が挙げられる。また、この他にも、女子のゲームの必要性や自然との交歓といった側面にも視線が向けられている。しかし不思議と思えるほどアマチュアリズムについては触れられていない。マイルズのこのプラグマティックな無体系性は、「ゲーム」のもたらす多様な手段的、教育的価値の可能性を示唆するものの、その構造的把握を保証しない。マイルズのプラグマティックな「ゲーム」教育論が武田千代三郎の「競技運動」(陸上競技、漕艇)を核として説いた「競技道」に影響を与えた影響は、断定は控えるものの、低いものであったと考えられる。

5. 結論

日本における「スポーツマンシップ」の受容は、イギリス人F. W. ストレンジの文字なき「スポーツマンシップ」によってその端緒についた。ストレンジの影響を強く受けた武田千代三郎は、ストレンジの教えを回想する中で西洋的「スポーツマンシップ」を次第に増幅させて「競技道」という概念に結晶化させた。1889年 (明治22) に武田は東京帝国大学を卒業したが、奇しくもその年にストレンジは逝った。その後1893年に武田は東京帝国大学の漕艇部にコーチ制を導入し、自らその任に就いたといわれる。[76] またこの頃、東京帝国大学運動会の会長に菊池大麓が就いた。ストレンジの「スポーツマンシップ」の増幅の過程には、明らかにこうした第一高等中学校や東京帝国大学を中心とする中・高等教育機関における運動競技の興隆と実践の進化が存在していた。その雰囲気を最も良く伝えるのが、『運動界』であった。この雑誌に掲載された菊池大麓や木下廣次の「運動」を巡る議論は武田の「競技道」を導く重要な言説を含んでいた。イギリスの学校とケンブリッジ大学で運動経験のある菊池大麓は、「運動の精神」の中で、イギリス人の「気象」(性格)が運動競技によって培われる「マンリネス」(manliness)、「プラック」(pluck)、「フェアプレイ」(fair play)、「マグナニミテー」(magnanimity)、「ゼネロシテー」(generosity)、「オーダー」(order)にあると喝破し、純正なイギリス的「スポーツマンシップ」の構造的理解をわが国に導入すると同時に、そうした資質が日本の伝統的な「武士道」と相通じるものであるとした。これに対して京都大学総長の木下廣次は西洋的「競技」の選択的受容を主張した。彼は「大和民族」の視点から、国民皆兵に寄与する運動を選択し、それを「武藝の道場」というアナロジーで捉えようとした。彼は競技の見世物化や職業化を忌避し、学生という将来の国家的エリートを鍛練し、養成するに相応しいアマチュアリズムの精神を強調したのであった。彼に顕著な民族主義、軍国主義的ナショナリズム、鍛練主義と結びついた「競技」と「運動」の理解は、武田の「競技道」に色濃く投影するものであった。一方、武田の『理論実験 競技運動』の内容に大きな影響を与えた*The Training of the Body* におけるS. T. マイルズの「ゲーム」教育論に見られる「スポーツマンシップ」は、陸上競技と漕艇を主内容とする武田の「競技運動」と齟齬を持つものであった。マイルズの論調に含まれる国際主義的視点は武田の「競技道」にはあまり顕著に見られず、マイルズに見られなかったアマチュアリズムの主張が武田の「競技道」には重要な要素として位置づけられている。武田の「競技道」は、ストレンジの直接的教授をその発想の種子としつつも、その発芽と生育を保証した養分は『運動界』に掲載された菊池大麓や木下廣次等の一連の記事や言説であったと考えられる。

武田千代三郎の「競技道」の系譜は上記のようなものであったが、彼の「競技道」は彼を取り巻く時代と世界の動向に対する鋭敏な反応でもあった。「競技道」の特色は極めて重層的、複合的な性格を持っていた。その第1は「競技」というものを手段性において把握する立場である。競技は「人らしき人」を作るための手段であり、伝統的な「修行」的実践として把握された。仁義礼智信という儒教道徳は西洋的「競技」を理解するための受け皿として、大きな軋轢もなく機能し得た。むしろ「競技」は人間修養の手段として積極的に受け入れられた。第2は「人らしき人」の資質を「武士気質」に一致するものと捉えていた点である。武士道に見られる忠誠、犠牲、信義、廉恥、礼儀、潔白、質素、倹約、尚武、名誉、情愛とい

う資質は「人らしき人」の資質と合致するものであった。武田は西洋的競技運動（スポーツ）を通じて、礼儀を重んじ、仁義を尊び、公明正大に全力を尽して勝負し、相手を己の師と見なし、勝敗を天運に委ねるという武士気質の養成、即ち「競技道」の確立を期待していた。武田は西洋的な「フェアプレイ」が武士道に内包されていると実感していた。武士気質は西洋的「競技」によって蘇生し、封建的身分秩序を超えた国民的性格を持ち得るものとして理解された。第3は、武田の「競技道」が明治期の代表的な教育理論、H. スペンサーの知育、徳育、体育という三育論の枠組みに依拠していることである。武田は競技運動が身体と徳と智の鍛練手段であると信じ、「国民」形成に不可欠な教育活動と見なしていた。第4は、「競技道」の鍛練主義を正当化するソーシャル・ダーウィニズムの影響である。武田は明治維新後の日本の社会を生存競争の場、「智力競争」の時代として認識していた。学生の本分はあくまで学業にある。しかし将来の生存競争に備えて体を鍛え、徳操を磨くことが肝要であった。競技のもたらすハードシップはその準備であった。こうした側面は、マイルズに見られた「ゲーム」を「楽しさ」や「愉快さ」の故に評価する姿勢と対照をなしている。「競技運動」はあくまで鍛練的、修行的、修養的でなければならなかった。単なる娯楽追求の「遊技」(ゲーム) が「競技運動」に位置づけられない所以である。第5は、「競技道」とナショナリズム、帝国主義との結びつきである。武田が頻繁に使用する「覇國」とは帝国主義的国際競争に勝ち残る強国を意味している。「競技道」は日清戦争、日露戦争、朝鮮併合という日本の帝国主義的野心と拡張を視野に入れた好戦的な国民形成と結びついていた。第6は、「競技道」における絶対的服従の観念である。「理性正邪を論ぜずに命令権ある物に絶対的に服従する」という武田の紀律、秩序、権威への理由を問わぬ服従は、封建制瓦解後の日本の天皇制国家イデオロギーと深いところで共鳴している。第7は、武田の「競技道」における「素人」、アマチュアの強調である。武田の手段論は、競技が元来、何物にも左右されず、それ自体で価値があり、他への目的の手段となることを拒否するという本来的なアマチュアリズムの理解を妨げた。恐らく武田は名誉を重んじ、打算と利を嫌い、倹約と質素を重んじる武士の理念的な行動規範によって西洋的「アマチュアリズム」を理解しようとした。職人芸、大道芸、利を求める商人根性、つまり競技におけるプロフェショナリズムと商業主義は、武士道を理念型とする「競技道」において、いわば本能的に拒否された。第8は、武田の「競技道」には帝国主義的国際競争の視点を超える国際主義の感覚が希薄である。マイルズのゲーム教育論にはゲームが社交であり、国際的融和をもたらす手段であるという認識が存在したが、武田の「競技道」には「修行」、「鍛練」、「修養」という側面が強く、また国際競争の覇者を展望する視線が強い。第9は、武田の「競技道」は、個人主義、民主主義が希薄で、権威主義的傾向が強いということである。マイルズのゲーム教育論では「別々の人々の個人的経験はいつの日か全世界に影響を与える偉大な教授」であるという個人主義的、自由主義的、経験主義的傾向が明瞭であり、個々人の経験則から一般原則に接近しようとする民主的姿勢が見られた。しかし武田の「競技道」では、一般的に不可侵の原則がアプリオリに措定され、それへの到達が示唆される権威主義的傾向が強い。最後に、こう指摘した上で、武田の理想主義的傾向を評価しておかねばならない。日本が「競技」を西洋から受容し始めた黎明期において、武田はそれを排外することなく、青少年の教育に位置づけ、日本の青少年が「競技」を通じて「人らしき人」になれるという可能性を信奉していた。その競技に対する信奉は、近代オリンピックの創始者であるピエール・ド・クーベルタンの「競技教育」(l'education athletique)の考えに見出される競技に対する人間形成機能への信念と共有され得るものであった。武田の「競技道」は人間形成機能としてのスポーツマンシップの可能性を日本の若者に示し、一つの理想主義的イデオロギーを樹立したのであった。「競技」を人間形成として理解するとき、必ず手段論に逢着する。問題はその手段論ではなく、「人らしき人」という理念の内実、在りようなのである。

引用文献

1）阿部生雄 「イギリスのF. W. ストレンジ」 成田十次郎先生退官記念論集 体育・スポーツ史研究の展望 ―国際的成果と課題―， 不昧堂出版，1996，pp. 168-190.

2）渡辺融 「F. W. ストレンジ考」 東京大学教養学部体育学紀要 7号，1972， pp. 7-22．日本におけるストレンジについては，この渡辺論文に最も詳しい．

3）*Japan Weekly Mail*には次のようなF. W. Strangeの活躍が見出される．1876年5月に東京の築地本願寺前の広場で行われた東京アマチュア競技協会（Tokyo Amateur Athletic Association）の競技会で，クリケットボール投げと1マイル競走に優勝をし (JWM，May 20，1876)， 翌年10月に築地海軍兵学寮で行われた同大会では，クリケットボール投げ3位，ハンマー投げ2位，棒高跳び2位，1／4マイル走2位，1マイル走2位という成績を残している (JWM., Oct. 12, 1877)． 彼の活躍はこうした陸上競技に止まらなかった．彼は1877年6月にアメリカ艦隊の連合チームと横浜ベースボール・クラブとの野球の試合に出場し (JWM， June 5， 1877)，同年10月の横浜アマチュア漕艇クラブ (Yokohama Amateur Rowing Club) の秋季レガッタで舵付フォアを漕ぎ（JWM，October 12，1877)，1878年10月の横浜ベースボール・クラブ（Yokohama Base Ball Club）と横浜クリケット・クラブ（Yokohama Cricket Club）とのクリケット試合に出場し (JWM， October 12，1877)，その11月には横浜フットボール・クラブ (Yokohama Football Club) と東京・艦隊連合チームのフットボール試合に出場している (JWM，December 7, 1878)．また，JWMはストレンジの漕艇，クリケットの腕前を称賛している．

4）武田千代三郎 「本邦運動界の恩人ストレエンヂ師を想ふ (二)」 アスレチックス 第2巻第3号 大正12年 (1923) p. 129.

5）運動界 第1巻1号，p. 14. 「ストレンヂ氏が奔走により，渡辺洪基氏総長たるとき，帝国大学が運動会を起こした」と評価されている．ここでいう「運動会」とは種々の運動を統括する「体育会」に当る．

6） F. W. Strange *Outdoor Games*. Tokio， Z. P. Maruya & Co. 1883， pp. I-III.

7）武田千代三郎 「本邦運動界の恩人ストレエンヂ師を想ふ (一)」 アスレチックス 第2巻第2号 大正12年 (1923) p. 9.

8）同上，p. 7.

9 同上，p. 7.

10）同上，p. 8.

11）武田千代三郎 「本邦運動界の恩人ストレエンヂ師を想ふ (二)」 アスレチックス 第2巻第3号 大正12年 (1923) pp. 125-26.

12）武田千代三郎 前掲書（「本邦運動界の恩人ストレエンヂ師を想ふ (一)」 アスレチックス 第2巻第2号) p. 9.

13）武田千代三郎 「本邦運動界の恩人ストレエンヂ師を想ふ(四)」 アスレチックス 第2巻第5号 大正12年(1923)，pp. 13-14.

14）同上，pp. 6-17.

15）武田千代三郎は，この他にも『学校選手論』(大正11年）や『学生運動取締論』（大正14年）等でスポーツマンシップに言及している．前者では「運動場における教化の本義」である「知徳練磨の実習場」の意義を強調し，①競技の快は之を楽しむに在り，②競技者の恥じるべきは敵を見て逡巡したり，敵を侮ったり，狼狽したり，節制を怠ったり，最後まで敢闘しないこと，③自己の最善を尽くし敢闘する「不可勝」，④フェアプレー，⑤競技を喧騒紛擾の場としない自制心と紀律，⑥倹約と質素，⑦学業を第一とするアマチュア精神，⑧合理的，科学的練習法等をスポーツマンシップとして挙げている．後者は，主に，当時の運動界の悪習を，①貧汚の所為，②不正虚偽，③暴慢行為，④怠業，⑤野鄙なる言動，奢侈浪費といった点から批判し，アマチュアリズムの重要性を提唱している．武田の「競技道」と彼の後年の「スポーツマンシップ」との関係については稿を改めたい．

16）武田千代三郎， 理論実験 競技運動． 東京博文館蔵，明治37年，自序2頁．

17） 同上，p. 1.

18）同上書，pp. 14-15.

19）同上書，pp. 186-187.

20）武田千代三郎著 心身鍛練 少年競技運動 博文館蔵版 明治37年 (1904)，pp. 25-26.

21）同上書，p. 27.

22）前掲書(理論実験 競技運動)，p. 2.

23）同上書，p. 627.

24）同上書，pp. 604-605.

25）同上書，p. 606.

26）同上書，p. 607.

27）同上書，p. 607.

28）同上書，p. 608.

29）同上書，p. 121.
30）同上書，p. 610.
31）同上書，p. 612.
32）同上書，p. 613.
33）同上書，p. 615.
34）同上書，p. 617.
35）同上書，p. 618.
36）同上書，pp. 618-619.
37）同上書，p. 620.
38）同上書，p. 621.
39）同上書，pp. 621-622.
40）同上書，p. 624.
41）同上書，p. 624.
42）同上書，p. 625,
43）同上書，p. 625.
44）同上書，p. 627.
45）前掲書(心身鍛練 少年競技運動) p. 1
46）同上書 pp. 3-4.
47）同上書 pp. 2-3.
48）この点については，既にABE Ikuo, *Japanese Reception of Sport : A Modernization.* Bulletin of Institute of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba, vol. 22, 1999, pp. 73-91. において幾分か指摘したので，本稿では論述を省略する．
49）「運動界」第壹巻，第壹号，明治30年7月．p. 1.
50）前掲書（阿部生雄 イギリスのF. W. ストレンジ），184頁，190頁参照.
51）菊池大麓 運動の精神 「運動界」第三巻，第二号，明治32年，1～3頁．菊池の演説は明治31年11月1日頃に行われた東京帝国大学運動会の協議会の席上でなされた．「運動の精神」という表題は運動界の編集によるものと思われるが，的を射ている．
52）同上，1頁.
53）同上，1～2頁．菊池は次のようにストレンジを評価している．「今年のオックスホルドとケンブリッジは十艇長以上負けて非常に後へ下がった，ひどい負けで有ったけれども，負けても矢張り自分が決勝點につくまでは漕いで行く，決して號砲が鳴ったからと云って止めることはせなかった．是れは英吉利の競漕会に於て，必ずすべきこととなって居るのであります．それが即ち負けても勝も自分の往く所まで往く，自分が充分骨を折った上で負ける，自分のするだけのことはすると云ふ精神を表はして居るものであらうと思ふです．是れに反して日本の私の知って居る競漕会では，どんと號砲が鳴ると総ての艇が皆漕ぐことを止める，それは一の習慣であらうがあれは甚だ不体裁であると思ふ，大学の運動会の成立に付いては最も力を盡しましたストレンジと云ふ英人（高等学校の教師）が大学の競漕会の席に此ことを始終気にしました，それは英人の眼から見ると，気に障って堪らないのである」
54）同上，2頁.
55）同上，2頁.
56）同上，2頁.
57）同上，3頁.
58）同上，第三巻 第五号，明治三十二年五月五日，1頁.
59）同上，1頁.
60）同上，1～2頁.
61）同上，2頁.
62）同上，2頁.
63）同上，3頁.
64）武田千代三郎の『理論実験 競技運動 巻之上』は1903年(明治36)に出版されたが第六編「競技道」は付されていなかった．
65）F. A. Schmidt, M. D. and Eustace H. Miles, M. A. (Camb.), *The Training of the Body for Games, Athletics, Gymnastics, and other Forms of Exercise and for Health, Growth, and Development.* 1901, London: Swan Sonnenschein & Co. , Lim. New York: E. P. Dutton & Co. この本の分担はマイルズがPart I. How to learn and practise games and exercises, Part II. Advantages of games and exercises and of practising them rightly, Part VI. Summary, and final hints, Appendices I. Food for training, II. Some foundation-exercises for games and athletics, III. Training in relaxation and reposeの部分を担当している．一方，シュミットはPart III. The bones and joints, balance, and exercise, Part IV-I. The Heart and circulation. Right and left side exercises, Part IV-II The Lungs, breathing and its effects, Breathing exercises, The skin, and clothing, Part IV-III. Feeding, digestion, and nourishments, Training, Part IV-IV. The nerves, rapidity, promptitude, Fatigue, The eye, Part V. Positions and movements and exercisesの部分を担当している．

66）Ibid,　p. ix.
67）Ibid. , p. x.
68）Ibid. , p. xviii.
69）Ibid. , pp. x-xi.
70）Ibid. , p. xii.
71）Ibid. , p. xii.
72）Ibid. , p. xviii.
73）Ibid. , p. 47.
74）Ibid. , p. 47.
75）Ibid. , p. xviii.
76）運動界，第1巻第1号，p. 8.